

明治二〇年代の女子向け歌論と与謝野鉄幹「亡国の音」

堀下翔

はじめに

与謝野鉄幹「亡国の音（現代の非丈夫的和歌を罵る）」は『二六新報』に明治二七年五月一〇日から五月一八日まで、一四日を除いて連続全八回掲載された歌論である。鉄幹の初期歌論としてしばしば参照されるもので、成立背景として萩野由之「和歌改良論」の存在（小泉荃⁽¹⁾）、日清開戦を目前とする時局（和田繁二郎⁽²⁾）、賀茂真淵の「ますらをぶり」と「たをやめぶり」の議論（中皓⁽³⁾）などが指摘されている。また、明治期における百人一首の受容を明らかにした岩井茂樹⁽⁴⁾が重要な示唆をしている。岩井によると、明治期には恋歌を非難する言説が多出しており、その一つに「亡国の音」が数えられるという。具体的に挙げられる記事は以下⁽⁵⁾。

■落合直文「恋歌といふもの」（『女鑑』第四号、明治二四年一月五日）。

■林蘊臣「恋歌はよむべからず」（『女鑑』第二一号、明治二五年九月二〇日）

■奎堂散史「恋歌は詠むべからずといふ説を読みて」（『女鑑』第二六号、明治二五年一月五日）

■与謝野鉄幹「亡国の音」（前出）

■高崎正風「恋歌を論じて作歌の精神に及ぶ」（遠山稲子編『歌ものがたり』明治四五年五月、東京社）

鉄幹以前の言説が『女鑑』に集中している点に注意したい。上京以前の鉄幹は徳山女学校の教師であったし、二六新報社に入社する以前には『婦女雜誌』にしばしば寄稿するなど、初期のキャリアは女子教育と関係するものが多い。

「亡国の音」の背景には、当時の女子教育を想定することができないのではないか。この点を問うのが本論の目的である。

ことは何も鉄幹に限らない。明治期の和歌は女子教育と近い位置にあった。片桐顕智が「明治初期の詠歌論は、「女学雜誌」「女鑑」を中心として女性対象から発足する。雑誌の性質上啓蒙的論文としての詠歌論は、女性雑誌を中心とせざるを得なかつた現象もあり、又和歌文学の同好層、普及性が女性を対象とする文学的性質にも由るのであらう」というように、明治期とりわけ明治二〇年代の歌論

には、読者を女性と想定したり、内容を女性にひきつけたりするものが散見される。雑誌メディアが急速に発達する中で、細分化された読者層に応じた歌論が登場するようになったのである。

こうした歌論は顧みられる機会が極めて乏しい。例えば小泉多三編『明治大正短歌資料大成 第一巻』（昭和十五年六月、立命館出版部）という明治期歌論を集成した一冊があるが、取り上げられているのは萩野由之の「和歌改良論」や佐々木弘綱の「長歌改良論」、山田美妙の「日本韻文論」といった論争を巻き起こした歌論が中心であり、片桐が指摘する女子向けの歌論群は等閑視されている。

明治二〇年代、雑誌メディアで女子に向けて書かれた歌論ではないが、何が語られていたのだろうか。本論では、まずは迂遠を厭わず明治二〇年代における女子と和歌とに関する言説の生成を跡づけ、最終的には「亡国の音」の新しい位置づけを探っていく。

一 女子の特性と和歌

明治二〇年代の女子向け歌論においては「実情」「真情」を詠むことが重視される（以下、傍線は筆者）。

鈴木弘恭「和文学講義 第五回 和歌の事」（『女学雑誌』第六八号、明治二〇年七月二三日）

正直に実情実景を述べたる歌は実に人の心を感じしむるものなり貴嬢等ことに此所に注意すべし

佐々木小鈴（佐々木信綱か）「詠歌論第一」（『女学雑誌』第一一三号、明治二一年六月九日）

歌は真情より出るものにしあればその主とするところは誠実を基としてかりにも詐偽の作物をよましと心がくへきなり

磯貝雲峰「詩歌を学ぶの効用」（『女学雑誌』第二〇〇号、明治二三年二月一五日）

人より題を与らるゝにせよ苟も詩歌を作為せんと欲せば先づ実情実景を想像の中に画かざる可らず

井口隆太郎「和歌のしるべ」（『女鑑』第一号、明治二四年八月八日）

和歌は耳に聞き目に見て心に起る感情の、外に現はれたるものなれば、いたく巧みによみいでんとすべからず。たゞありのままによみいづべし。

虚飾のない詠歌を是とする志向が共通しているが、これは近世歌論に由来するものである。とりわけ「実情」は近世歌論の鍵語である。武者小路実陰が「歌はたゞ実情を先としつねに実情を心がくべし」（似雲『詞林拾葉』）と述べたように堂上歌人らが重視したのに対して、国学派は概ね否定的であったが、さらに香川景樹が賀茂真淵を批判する形で「いにしへの歌の調も情もとのへるハ、他の義あるにあらず。ひとへの誠実より出ればなり」（『新学異見』）と論じたという経緯がある。先に挙げた明治二〇年代の女子向けの歌論

は主に「誠実」を追究する景樹歌論の影響下にある。

もっとも「誠実」に裏打ちされた「実情」の称揚は、女子を対象とするものに限らない。景樹を始祖とする桂园派の影響力が強かったこの時期の歌論であればしばしば見られるものである。

しかしながら、こと女子教育に関していえば、かような言説は女子の特性と結びつけられる形で発展してゆく。

男女同権が唱えられていた当時、女子の地位向上が目指されるにあたって、啓蒙家たちはしばしば、女子の特性を育むという回路を採用した。ここにおいて女子の特性とされたのが感情である。例えば老川居士「文学は男子の天職に非ず」(『女学雜誌』第二〇一号、明治二三年二月二日)は人間の特性の性差を「豪放と云ひ磊落と云ひ剛毅と云ふ皆男子の天質にして婉美と云ひ精緻と云ひ温和と云ふ皆女子の本性なり」と区分した上で、精緻な感性を必要とする詩歌や小説は女子にとっての「天職」であるとす。

「天職」というキリスト教的概念を介して女子と文学の実作とを結びつける発想は、同年に発表された雲峰の「女子蓋ぞ和歌を学ばざる」(『女学雜誌』第二〇六号、明治二三年三月二九日)にも共通している。ここで雲峰は「余は今女性諸君の事に就き多言を費さず只諸君が男子に比して大に感情に富む事を諸君と共に認むるを以て足れりとす」と述べ、女子が持つとされる小心や多涙といった心性も感情の豊かさに起因するものであってそれはむしろ長所なのだと言及、「其天職を全ふせん事を希望する」と読者に呼びかけている。

詠歌が実情を誠実に表出する営為なのであればこそ、その適性は

感情が豊かだとされる女子に見出されたのだ。

これら『女学雜誌』の言説が出回った明治二三年には中島歌子の萩の舎で歌を学んだ田辺龍子(三宅花園)も「女子詠歌論」(『日本之文華』第一卷第八号、明治二三年四月一四日)で近い意見を述べている。

日本は美術ことに進歩し、泰西諸国の人々をもさく／＼及ばぬよしふとか間に、女の長所も又美術なりといへば、よきがうへにもよからん事を願ひて、其美術を習ひあきらめずハあるべからず。美術といふもさま／＼あれど、かの目に見えぬ鬼神をあらはれと思はせ、猛きものゝふの心をもやはらぐるといふやまと歌こそ、此国に生れては一際心をつくして学ばまほしき業なれ。泰西諸国にても詩を美術中の美術とたとひ、殊に女のを(よ)しとすとす。さるを歌としいへば、徒に明石の浦に嶋かくれゆく舟ををしみ、田子の浦に富士の雪をめで、月にうそぶき花にうかるゝものとのみ思ひたるハかたはらいたく、をこの限といふべし。歌は知識をすゝめ心を優美にする具にて、女にはかの泰西詩の如く、よく適当したるものなるを(…)

こうした言説が明治二三年に相次いで出現しているのは、男女同権をめぐる当時の状況が関係しているようか。男女同権の理念自体は明治初年代から議論され、和歌でもこの語を新題として取り入れるものが現れるほどであった(『咲かはずいもせの山の桜花いつれをまさるゝるかは見ん』細川春流『奇題百詠』明治一二年七月、小

林二郎)。しかしながら明治二二年二月に公布された大日本帝国憲法では女性の権利が民間の議論ほどには取り上げられなかった。結果、『女学雑誌』ではこれを危機とする姿勢を取ることとなった。⁽¹⁰⁾明治二三年は十一月の憲法施行にあたって女子の地位向上に益する特性の性差を強調すべきタイミングだったのである。

龍子の「女子詠歌論」になお付言しておく。和歌を風雅の遊びとみなさず「知識をすゝめ心を優美にする具」とする位置づけは秋野由之の「和歌改良論」(小中村義象・萩野由之『国学和歌改良論』明治二〇年六月、吉川半七)に始まる一連の和歌改良運動で共有されていたのだが、龍子はこれを女子の特性と紐付けている。

「女子詠歌論」末尾には「いかでこの都の女学校にては和歌の一曲をまうけ、あれにし歌のあらず田すきかへされん事こそ願はしけれ」という一節がある。これは香川景樹の歌へしき島の哥のあらず田荒にけりあらずきかへせうたのあら榎田(『桂園一枝』)月、事につき時にふれたる⁽¹¹⁾を踏まえたものである。龍子とともに萩の舎で和歌を学んだ樋口夏子(一葉)にも〈敷寫のうたのあらず田すきかへし昔の春はたれか見すらん〉(題「寄哥述懐」⁽¹²⁾)の作例があるから、桂園派との交流もあった萩の舎の女子たちにとり身近な歌だったのであろう。後世の和歌／短歌史記述では新派に否定された旧派の代表格として位置づけられる傾向にある桂園派だが、龍子はむしろ景樹の歌をよりしるにして新時代の和歌のありかたを夢みていたわけである。

二 女子が歌を詠むということ

しかしながら、女子は自由に和歌を詠むわけにはいかなかった。冒頭で言及したように、恋歌が非難されることがあったのである。

『女鑑』第二一号(明治二五年九月二〇日)に掲載された歌論「恋歌は詠むべからず」(のち「淑女」第二卷第四号、明治三三年四月一日に転載)で、国学者・林甕臣は次のように述べる。

歌ばかり徳性を涵養し、風教を感化するに、預りて、力あるものは、有らじ。ゆゑにようせずば、風教を害し、徳性を、みだすも、また推して知られたり。世に恋てふ歌の題、与へて、をみな児どもに詠まするは、何ごとぞや。いかなる考へにか。俗曲の野鄙猥褻のうたども、酒のむしろ、ことほぎのたのみ、などに、ざれくつがへらんに、何ぞ異なるべき。ほゝえまんも、苦々し。腹かへんも、お坐が醒めたり。

女子や児童が恋題の歌を詠む風景は異様だといっているのである。

和歌史上、恋を詠む営為は自明のものであった。『万葉集』がすでに相聞歌の巻を持ち、勅撰集以降ほとんどの歌集は恋部を備え、題詠が隆盛してからは無数の恋題のバリエーションが生まれている。近世においても、たとえばよく知られる本居宣長の「歌ハ恋をむねとする事をしるべし」(『石上私淑言』⁽¹³⁾)の言葉のように、恋歌はむしろ称揚されることが大半であった。淫靡に傾いた恋歌が非難されることこそあれ実情に基づいた恋歌ならば問題にはならな

つた。¹⁴ かつ、前近代の社会が多分にホモソーシャルであったにせよ、いつの時代にも女性歌人は存在し、子どもが歌を詠むこともあった。にもかかわらず恋歌が非難の対象となる事態が招来されたのは、社会における「恋」の位相が変調したためであろう。西洋の概念である「愛」が受容された結果、「恋」は情欲の口吻を有するものとして「愛」と区別されるようになった。その一例として磯貝雲峰が『女学雑誌』第二四二号（明治二十三年二月六日）に寄稿した「文人は愛なくんば不可也」を挙げよう。ここで雲峰は「余は愛情の天賦の美性なるを信ずるが故に決して之を卑しめず、卑しめざるが故に強ひて之を絶てと云はず、されど東洋に古来云ひ伝ふる所謂恋なるものに至つては其宜しきを見ず、何となれば必らず下等の情欲を伴ふを見ればなり、是豈真誠の愛情なりとせんや」と述べ、「恋」を「愛」よりも下等に置いている。

「恋」が含意していた情欲自体が元来はあながち下等のものとは考えられていなかったわけで、ひとたびその価値観が顛倒してしまえば、『女学雑誌』内外で女学生に和歌を指南していた鈴木弘恭による「徒然草の第三段は猥褻に非る論」（『女学雑誌』第二一三号、明治二十三年五月一七日）のような論考も出現することになる。「いろいろのまざらん男」を「いとさう／＼し」と嘆く『徒然草』第三段を猥褻とする見方に反駁したもののだが、そのロジックは「是れは至愛の情をいへるなれど言葉を強めてかく大げさにいはれし」というものである。「至愛」はこの時期、キリスト教関係者の言説において神の愛の意で用いられていた話であり、鈴木は情欲と西洋的な「愛」を重ねているわけだが、いささか無理筋とも思えるこの筆致は、幕末

に国学を修めたキャリアを維新後には女子教育に活かすことになった鈴木が価値の転換の中で抱えていた矛盾を反映しているように。

加うるに、前節で指摘したように、明治期歌論では実情を詠むことが奨励され、女子は感情に特性があるゆえに和歌に適していると考えられていた。とすれば女子が詠む恋歌は、さしずめ実情に満ち満ちたものということになる。この点をさらに考えてみると、当時の題詠についての理解も問題となる。前節で挙げた雲峰の「詩歌を学ぶの効用」が「人より題を与らるゝにせよ苟も詩歌を作為せんと欲せば先づ実情実景を想像の中に画かざる可らず」と述べている点に注意したい。鉄幹が「亡国の音」で再三批判しているように、当時の和歌は大部分が題詠で詠まれる。しかし題詠であってもその題から発想した景を心に映さなければならぬというのである。これはひとり雲峰の理解ではなく、藤井行麿「和歌手ひきくさ」（『女鑑』第一号、明治二十四年八月八日）にも「題を得ても題と思ふべからず、やはり実景実事になして、花ならば花をこゝろのうちにかかせ、月ならば月をこゝろにいだし、それを見る心になりてよむべし」とあるように、常識に属することがらであった。

藤井の「花ならば花をこゝろのうちにかかせ、月ならば月をこゝろにいだし」という表現を借りれば、恋ならば恋を心に浮べることが題詠である。そのとき女子たちは、恋題を実情として心中に想起し、内面化しているとみなされる。

具体的な説明を試みる。次に掲げるのは明治二四年に萩の舎の門下生らが行った難陳の様子である。作者は不詳、判者は樋口夏子が務めた。題は「寄橋恋」。

八ツはしのくもてに物をおもふ哉つれなき人を恋わたるミは
上の句少しふるけれと詞のつゞけから優に聞え侍れば恋の
御哥のうちにはこれをこそ⁽¹⁵⁾

『後撰集』巻九恋一に「つらかりける男に」の詞書で載る「たえはつる物とハみつゝさゝがにの糸を頼める心ぼそさよ⁽¹⁶⁾」の返歌（「ちわたし長き心ハやつ橋のくもてに思ふことハたえせじ」）を証歌とする歌である。「たえはつる…」の「さゝがに」は「蜘蛛」（佐々木弘綱編『雅言小解 下』明治二二年八月、加藤万作）の異称で、「蜘蛛の糸の衣にかゝる時は必思ふ人の来る前証なりといふ諺」（佐々木弘綱・佐々木信綱編『日本歌学全書 第二編』明治二三年一月、博文館）を踏まえる。返歌の「くもて」は「橋の架け方打違ひたる」さま（増田于信・落合直文校訂編『後撰和歌集』明治三一年九月、東京図書出版）の謂いで、懸歌の「さゝがに」にかこつけている。難陳の掲出歌の歌意は、なさけ知らずの人を恋い慕いつづけていると、三河八橋の蜘蛛手のように四方八方に物思いをしてしまう——といったところだが、「物をおもふ」「恋わたる」といった詞のみならず、初句「八ツはしのくもて」も証歌から恋を匂わせている。「寄橋恋」という歌題は建久年間の六百番歌合の頃に生じ、その後各種の百首歌や『題林愚抄』や『新明題和歌集』など近世の有力な類題集にも採られているが、『後撰集』の前出歌を踏まえる類想は見られない。香川景樹の秋歌に「ゆく水のくもてにかくる八橋をさきりハひとつにたちわたりけり」（『桂園一枝』雪、題「橋上霧」）があ

るが、景樹歌では証歌の恋の匂いが骨抜きにされ、叙景的な歌となっている。してみると掲出歌は、題につきづきしい趣向を凝らした佳什といえよう。

もっともこの趣向は夏子の眼にはいくらか大時代と映ったらしい。評は、その欠点を補うばかりに続けがらがすすぐれていかにも恋の歌らしい——と述べたものである。続けがらとは歌詞の続きようを指す歌学用語で、停滞のないことがよしとされる。「歌ハたゞおなじ詞なれど、つゞけがらいひがらにて、よくもあしくも聞こゆるなり」（鴨長明『無名抄』⁽¹⁸⁾）というように、詠歌では詞の選択だけではなくその配置にも気を配る必要があった。

御歌所の高崎正風は「年齢等に閑はず、誰でも詠み得らるゝやうな題がよろしいと思ふ」（「恋歌を論じて作歌の精神に及ぶ」という理由から宮中の歌会で恋題を出題しないようにしたという。正風の方針は国民から広く詠進を募る場合には有意義であったと考えられる。しかし和歌規範を習得した者であれば、たとい年若い女子であったとしても、題を解釈し、あまつさえ批評を加える身ぶりを示すことは、さほど困難ではなかったのである。

これがちに師・歌子から後継者とさえまなざされる夏子の属人的な才によるものでないことは、この難陳が門下生同士で行われたものであることから窺えよう。別の難陳歌合では「隔年恋」の題で夏子が出詠し、別の門下生の判を受けてもいる。いずれの難陳も門下生の邸宅に一〇数名が集って行われた。そこで出題される恋題は近代的価値観においては「下等の情欲を伴ふ」もの（雲峰「文人は愛なくんば不可也」）であったろうし、その種の題を女子たちがこ

もなげに詠む風景を見る者かもしあれば、「ほゝゑまんも、苦々し」(甕臣「恋歌は詠むべからず」という感想が惹起されることもあった)ではなからうか。

女学校に通う門下生もいたとはいえ、萩の舎自体は一私塾であり、学校制度の埒外にあった。歌会や難陳に恋題が出題されたのも、そうした場の性質が影響していたかもしれない。萩の舎に若き女子たちが集っていたのと同時期に、鈴木弘恭が『女子類才集』(明治二十一年七月、中外堂)という撰集を編んでいる。華族女学校、高等女学校、跡見女学校、成立学舎女子部、明治女学校などに通う女学生の歌と和文を輯めた一冊で、和歌は部立ごとに掲載されているのだが、四季部で完結しており、恋部がない。

御歌所派の税所敦子をはじめとする旧派の女性歌人の家集は、管見の限りでは西升子『磯若菜』(明治四三年三月、私家版)を除いて総じて四季部の後に恋部を備えている。こうしてみると『女子類才集』が恋部を欠いているのは、女学生に恋歌を詠ませることを避けた結果ではないかと想像される。同書の同時代評には「凡そ和歌及び和文は今の女子教育に欠く可らざるの学科たり吾人は何れの女学校に於ても此二科の備わらんことを望むが故に亦た其女生方が能く此の二科に熱心ならんことを尤も願ふものなり」(無署名「批評女子類才集」、『女学雑誌』一一一、明治二十一年七月二八日)という一節が見出せる。田辺龍子も前出「女子詠歌論」で女学校における和歌教育を熱望していた。裏を返せば、学校制度上の身分にある女学生が和歌を詠むとき、そこには教育の見地が差し挟まれる。

三 鉄幹「亡国の音」への展開

さて、ここまで明治二〇年代の歌論を女子教育の側面から辿ってきたが、最後にこれらの歌論と鉄幹の「亡国の音」との関係を描いておきたい。その最終回に次のような箇所がある。

彼等歌人の多数は『恋歌』を排斥せざる也、排斥せざる猶可なりと雖も之を奨励する者あるに於ては沙汰の限と云べし、云く『恋歌』は歌の真髓、よむこと最困難なる者、之をよむ易々たるに至つて初めて歌を知り得たる也と、先づ授るに百人一首伊勢物語等の情歌を以てす、之を久しうして模倣的情歌は作らる、題に云く初恋、通書恋、逢恋、恨恋、甚しきに至りては思二人恋、比丘尼恋、思伯母恋など云ふ題さへあり、教ふる者学ぶ者老人青年互に坐を交へて歌ふ、彼等は以て得々たる也、而して醜聞は往々妙齡歌人の間に起る、世に風俗を壊乱するものあらは余は此『恋歌』を以て其一に加ふるを躊躇せざるべし

恋歌を非難する論調が甕臣の「恋歌は詠むべからず」と共通している。ただし甕臣の論は掲載誌や「恋てふ歌の題、与へて、をみな児どもに詠まするは、何ごとぞや」という文言からいって主に女子が恋歌を詠むことを問題視したものであった。「亡国の音」との関係が指摘できるのはむしろ、「恋歌は詠むべからず」に対する賛意を示した奎堂散史「恋歌は詠むべからずといふ説を読みて」(『女鑑』第二六号、明治二五年一月五日)の方である。

同記事には「恋の題を与へて歌よましむるが如きは、実に少壮女の徳性を汚し、心術を破る」という一節があり、恋歌が害をもたらすものが「少壮男女」へとすり替えられている。これは鉄幹の「亡国の音」でも同様で、「老人青年」が列座するなかの「妙齡歌人」たちが問題化されている。また奎堂散史は前出箇所が続けて「延て国家の風教を破り、道徳を紊るの害、挙げて言ふべからず」と述べているが、「亡国の音」にも先に引いた箇所の直前に「国を危うする者は大丈夫の元氣衰へて女性之に克つに在り」という箇所があり、こゝが国家の存亡への憂慮に紐付けられている点が共通している。

女子向け歌論との関係は恋歌に言及した箇所に限らない。

「亡国の音」には大家たちの歌を挙げて「今や上下挙つて此類の女性的和歌を崇拜す其害毒果して如何」(最終回)と主張する箇所がある。女性的な和歌の拡大を危惧するこの論旨は、その原型が明治二六年の「女子と国文」に見いだせることが永岡健右によって指摘されているが、⁽²⁰⁾「女子と国文」は第一回で鉄幹が自ら明らかにしているように、同誌の第二巻第一号(明治二五年一月一日)に掲載された落合直文の「明治の清紫」を受けて執筆されたものである。直文は次のように述べている。

女子ハもと優美なるを最上の徳とす。さてハ、その作る文よむ歌もおのつから優美ならざるべからず。(…)国文学は優美なり。女子には適當なり。女子には、学びやすく、さとりやすきなり。

言をかへていへば、国文学ハふるくより女子の長所とするところなり。優美を徳とする女子にして、この優美なる国文学に力

を用いねば、ただに女子の品位を高うするのみならず、ただに女子その人の娯楽のみならず、それに伴ふところの幸福実にいふべからざるものあらむ。

特性に合致した分野を選択することで幸福が得られるという論旨は、明治二三年に湧出した女子の特性をめぐる議論の延長線上に布置することができよう

鉄幹は「女子と国文」で述べる。師の「明治の清紫」から一年を経て各種の女性雑誌で和歌・和文が隆盛しているのは喜ばしい。しかし憂うべきことがないではない。「女子の意大に驕り、益々国文学に耽りぬ」(第三巻第八号、明治二六年四月一五日)。直文が女子の幸福として想像した風景を鉄幹は否定的に捉える。問題の所在は女子教育ではなく、あくまで国文学が女性的な優美に偏して発達してきたことだという。ために議論は「亡国の音」へと接続する男性的な文学への理想へと続いてゆく。

こうしてみると明らかのように、「亡国の音」の前提には明治二三年における女子と文学の適性の議論があったと考えられる。⁽²¹⁾

萩野由之の「和歌改良論」が詠史題を「学問ノ資トナリ、識見ヲモ長スル利益アルヘシ」と位置づけているように、和歌改良運動自体が、和歌を教育の文脈で見ようとする性質を持っていた。『婦女雜誌』にも改良論者の一人・高津敏三郎が「和歌と教育」(第三巻第一号、明治二六年一月一日)と題する一文を草し、和歌を教化の具として活用する道を論じている。本論で見てきた一連の女子向けの歌論も和歌改良運動の一廓を占めていたと考えられる。しかも女子向

けの歌論にあつては、和歌は国民教化の具に留まらず、作者の人生や和歌というジャンル、女性の地位、ひいては国家にも利する可能性が期待されていた。

鉄幹はその土壤から出立し、ひとたびは生じた女子の可能性を転換させることで、和歌改良の志を果たそうとしていたのではないかと、このころ、甕臣にせよ奎堂散史にせよあくまで根底には恋歌を詠む者の心性に対する憂いがあるわけ、現代では抑圧とみなされる性質のものではあるうが、甕臣であれば「をみな兒ども」、奎堂散史であれば「少壮男女」を教導する意識がある。これは恋歌非難に対する反論でも同様である。例えば前出の高津鋏三郎「和歌と教育」には、「古の賢婦の志操を慕はしむる効」のある和歌もあるから、害の有無を教師が選択して教授するのが肝要であるとする一節がある。また時期としてはやや下るが、佐々木信綱は「恋歌につきて」(『こころの華』第三号、明治三十一年四月)²²にて、自著『歌のしをり』(明治二十五年四月、博文館)で恋歌を挙げなかったことを評価する読者に対して、これは「若き人を導かむたづき」であつて恋歌自体を否定するものではないと述べている。

かように恋歌非難に対する反論は、恋歌自体は擁護しながらも年少者への教育的配慮を認めるという立論が多い。恋歌非難の言説自体が教育的見地から出発しているわけで、反論者としてもその非難の妥当性は認めざるを得ないものだったらしい。従つて議論は教育が焦点となる。

しかし「亡国の音」にはこの意識が見出しがたい。俎上²³に上がるのは〈女性〉ではなく〈女性性〉である。

女子向け歌論を転換させたのが「亡国の音」だったとすれば、この歌論の達成は那邊にあるだろうか。

『帝国文学』第八号(明治二十八年八月一日)の雑報欄に「和歌の題目」と題する無署名記事が掲載されている。歌壇における恋歌非難の言説と日清開戦前後から増加した時局的な和歌に対する批判である。

彼恋歌は淫靡厭ふべく、風俗を壊乱するものなりなどいふ者は、徒に肉牖の恋を知て、所謂物の憐を知るの何物たるを解せざるの徒のみ。和歌の精粹は実に恋歌にあらざらばならず。(…)征清の一挙、歌人の心を動かしたるもの少なからざらむ。然れども雄壮奇矯は漢詩の長所にして和歌の短所なれば、戦場角闘の事之を漢詩に譲て可也。然れども孤兒飢に泣く処寡婦病に臥する処、果して歌人の同情を博するに足らざる乎。和歌の精粹たる広義にいふ恋歌を作るの時期は正に今日に在るを信ずる也。

「風俗を壊乱する」という表現が「亡国の音」と共通していることからいって、とりわけ鉄幹を念頭に置いていることが想像される。この批判は恋歌を擁護するにあたって日清戦争を囁ませている点に特色がある。恋歌非難に対する反論が総じて年少者への配慮の視点を含んでいることはすでに触れた。ところが「和歌の題目」には教育の視点が欠落し、恋歌を時局の問題と絡めようとしている。

この時期には日清戦争に関する歌を詠んだ歌人が多い。新聞紙上には報道に即応した時事詠が並び、また佐々木信綱編『征清歌集』

（明治二七年一月〇月、博文館）、四宮憲章篇『甲午振兵雅頌』（同年一二月、明治文学会）、大淵涉編『討清歌集』（明治二八年二月）といったアンソロジーも編まれた。これらのアンソロジーには鉄幹や落合直文、小中村義象ら改良陣営の歌人が参加したものもある。

和歌改良運動では、実作を示す新人の登場を待望する機運が明治二〇年代前半に高まり⁽²⁴⁾、その期待は明治二六年の浅香社結成を経て明治二九年に新派の最初の作品集である鉄幹『東西南北』刊行によって果たされることになる。日清戦期における時事詠の流行はこの〈言説〉から〈実作〉への移行という改良運動の転換期と重なっているわけで、『東西南北』の基調をなすのが壮烈な時事詠であることを思えば、両者はあながち無関係ではなく、日清戦争が実作を活性化させた節がある。

一方でこの時期、由之の「和歌改良論」に端を発する論争はすでにほぼ収束した観があり、時勢を読んだアクチュアルな議論へと進む展開も「亡国の音」のほかは見られない。それは換言すれば〈実作〉が〈言説〉を追い越した瞬間であった。

そのことを踏まえると「和歌の題目」が日清戦争を問題としているのは示唆的である。先に引いた箇所を読めばわかるように、記事の核心は「和歌の精神は実に恋歌にあらずんばあらず」という一点に尽きており、実のところ日清戦争は論旨に関係しない。にも関わらず日清戦争に筆が及んでいるのは、執筆者の念頭にあったのが、時事性を孕む「亡国の音」であったからである。

すなわち「亡国の音」の達成とは、教育と不可分な女子向けの歌論を読み替え、最新の社会状況を視野に入れた議論に持ち込むこと

で、和歌改良運動の言説の水準を引き上げたことではなかっただろうか。

おわりに

明治二七年一月二三日付の『二六新報』に、「殊勝なる少女」と題された次のような美談が掲載されている。

社員が国文学者の家を訪れたところ、その日たまたま講義を求めて来訪していた少女がおり、学者はその少女に、二六新報社内で話題になっている話を聞かせる。それは春以来、二六新報社に揭示してある当日の新聞を熟読し、「詞叢」欄に載る和歌を手帳に書き留めてゆく少女の話である。すると来訪していた少女は顔を紅潮させて、それは自分のことだと明かす。埼玉出身のその少女は幼少期から文学が好きで、長じて女子高等師範学校に進んだが、病や家業の斜陽によって退学、しかし国文への志は捨てがたく、日本橋の親戚を頼って再上京し、家事手伝いの傍ら諸大家を訪問して学びを授けられているという――。

美談の真偽は措くが、当時、女学校やメディア、大家の私宅などの場で和歌に向き合っていた女子たちは、たしかにいた。

この時期の『二六新報』の学芸部長は、落合直文の推薦を受けて入社した直文の書生・鉄幹その人である。「殊勝なる少女」も鉄幹の筆かもしれない。

この記事が掲載された頃、鉄幹はこんな歌を詠んでいる。

賤が家の山吹さけりあるじには歌よむほどの少女子もがな

初出…『二六新報』明治二七年四月八日付

無題

我どちの、歌のこゝろに、かなひたる、少女もあれや、いざ恋してむ。

初出…未詳

『東西南北』（明治二九年七月、明治書院）所収

和歌を解する「少女」が詠まれているが、その姿は同時代の言説で期待される女子像とはいささか異なる。賤の家ながらに見いだせる風流を体現する少女。「我どち」の歌材にふさわしい少女。少女は客体化されている。「我どち」は直文のもとに集って新時代の和歌の実作を試みた浅香社の同人たちだろう。鉄幹にとり賤の家のあるじである少女が詠む和歌と「我どち」の和歌とに価値の高低があったことはいうまでもない。なお浅香社には国分操子ら数名の女性同人があったが、鉄幹、金子薫園、尾上柴舟、服部躬治ら男性同人が明治三〇年代までに早々に家集を刊行しているのに対して、彼女らが家集を持つことはなかった。

明治三〇年代以降の鉄幹の文学活動が恋や美を鮮烈に歌う晶子の存在に支えられたことを思うとき、明治二〇年代における鉄幹の動きはむしろ迂回とも見える。

しかし、明治二〇年代の和歌改良運動の機運なくして晶子は登場しえず、そしてその和歌改良運動が二〇年代後半における鉄幹の論作の躍進なくして実質を獲得できなかったのも事実であろう。

けだし和歌改良運動の達成には、日清戦争以前の空気を色濃く残す運動の内実を、ミソジニーを多分に含んだ我田引水ではあれ、列強各国と比肩しつつある明治二〇年代後半の社会状況に合致するところまで引き上げる手続きが有効だったのではないだろうか。⁽²⁵⁾

注

(1) 小泉荃三編『明治大正短歌資料大成 第一巻』（昭和一五年六月、立命館出版部）

(2) 和田繁二郎「亡国の音」における人間と文学』（『立命館文学』第一一八号、昭和三〇年三月）

(3) 中皓「与謝野鉄幹の短歌観 其二」（『同志社女子大学学術研究年報』第一八号、昭和四二年一二月）

(4) 岩井茂樹「恋歌の消滅——『百人一首』の近代的特徴について」（『日本研究』第二十七号、平成一五年三月）

(5) 岩井論は鉄幹の「亡国の音」が正風の「恋歌を論じて作歌の精神に及ぶ」に対する反論として書かれたものだとしている。しかしこの歌論が収められている遠山稲子の『歌ものがたり』は、稲子の師にあたる正風が明治四五年二月二八日に歿したのち、「としごろ己が、師の君より承りつるくさく」の物がたりを、後の思ひ出にとて、其をりく書いしるし、猶一わたり校閲をねがひしもの（「序」）を纏めて公刊した書物であるから、鉄幹の「亡国の音」がこれを受けたものとする岩井説は不審である。なお小泉編『明治大正短歌資料大成 第一巻』は「恋歌を論じて作歌の精神に及ぶ」と「亡国の音」を並置し、「亡国の音」に関して「その鋒先が特に御歌所派に向かつてあることとは高崎正風の「恋歌を論じて作歌の精神に及ぶ」と合はせ見ることによつ

て容易に諒解せられるであらう」と述べている。同書は明治期における重要な歌論を概ね編年体で採録したものであるが、初出年代が大幅に異なるこの二論が並置されているのは、正風の「恋歌を論じて作歌の精神に及ぶ」で説かれている内容が旧派陣営においてある程度普遍的な理解であったことを推定するものであろうか。

(6) 片桐顕智『明治短歌史論』(昭和十四年一月、人文書院) 所収「明治初期に於ける詠歌論」

(7) 引用は佐々木信綱編『日本歌学大系 第六卷』(昭和三年四月、風間書房)

(8) 引用は佐々木弘綱・佐々木信綱編『日本歌学全書 第十二編』(明治二十四年二月、博文館)

(9) 判読不能。稿者が補った。

(10) 野辺地清江『女学雑誌』概観——形態の変遷を中心にして——(青山なを・野辺地清江・松原智美編『女学雑誌諸索引』昭和五年二月、慶應通信)

(11) 引用は香川景樹『桂園一枝』(明治二十五年三月、しきしま発行所)

(12) 『樋口一葉全集』第四卷上、昭和五六年二月、筑摩書房) 所収の数詠10「かずよみ詠艸 写し」

(13) 引用は佐々木信綱編『続日本歌学全書 第三編』(明治三二年四月、博文館)

(14) 林達也「近世和歌研究の諸問題——十七世紀恋歌をめぐる」(『江戸文学』第二十七号、平成一四年二月)に詳しい。

(15) 『樋口一葉全集』第四卷上、昭和五六年二月、筑摩書房) 所収の難陳3「難陳点くらへ 水辺花 寄橋恋」

(16) 引用は佐々木弘綱・佐々木信綱編『日本歌学全書 第二編』(明治二十三年二月、博文館)。返歌も同。

(17) 引用は香川景樹『桂園一枝』(明治二十五年三月、しきしま発行所)

(18) 引用は佐々木弘綱・佐々木信綱編『日本歌学全書 第十二編』(明治二十四年二月、博文館)

(19) 『女子と国文』第三卷第六号(明治二十六年三月二五日)、同第八号(同四月二五日)、同第九号(同五月一日)、同第一号(同六月二日)。名義は「与謝野寛」

(20) 永岡健右『与謝野鉄幹研究——明治の覇気のゆくえ——』(平成一八年一月、おうふう)、第四章「鉄幹の歌評形式の系譜」

(21) 前出岩井論はこのほかに、恋題を列挙して批判する論述の体裁が直文の「恋歌といふもの」の影響を受けていると指摘している。

(22) 当該記事の存在は鈴木健一『佐佐木信綱 本文の構築』(令和三年二月、岩波書店)に教えられた。記して感謝する。

(23) 関礼子「花圃と鉄幹をめぐる問題系」(『日本近代文学』第七五号、平成一八年一月)は「亡国の音」について「鉄幹は「女子と国文」で行ったように、女性性を否定的媒介にすることで男性性を押したて旧派和歌の牙城たる御歌所派に向かったのである」と指摘している。

(24) 注(6) 片桐著「明治初期に於ける歌人待望論」

(25) そのことを確認した上で、むしろ、かたえに埋没した女子向け歌論群の存在とその価値については、十分に強調しておきたい。

※本研究はJST次世代研究者挑戦的研究プログラム(PJMS/SP2124)の成果の一部である。